ケアのある風景

医療法人徳洲会

介護老人保健施設 岸和田徳洲苑



四半世紀にわたって地域に寄り添い「住み慣れたまち」での暮らしを継続できるようにサポート

「生命だけは平等だ」を理念に掲げる徳洲会グループを母体とする、介護老人保健施設「岸和田徳洲苑」。〝みんなが笑顔になる施設〟をモットーとし、「いつまでも住み慣れた地域で暮らしたい」と願う入所者に寄り添いながら、在宅復帰を支援している。

撮影／木村哲也



同施設のモットーは、「みんなが笑顔になる施設」



老健フロアの食堂は、いつも和やかな雰囲気

ハード&ソフトの両面を整備し、在宅復帰に向けた意欲を促す

大阪府南西部の泉南地区に位置し、２０２２年に「市制１００周年」を迎えた岸和田市。その昔、岸和田藩の城下町として栄えた名残りを残す街並みが印象的だ。その一方、「岸和田市」と聞いて真っ先に思い浮かぶのは、市の象徴でもある一大イベント「岸和田だんじり祭り」だろう。五穀豊穣や疫病退散を祈願する祭礼として３００年以上の歴史を有し、その豪快なパフォーマンスは全国的にも有名だ。９月の開催日には毎年国内外から多くの見物客が訪れ、まち全体が活気に満ち溢れる。

そんな「城とだんじりのまち」として知られる同市内に、１９９８年に開設されたのが介護老人保健施設（以下、老健）「岸和田徳洲苑」（定員１００人）だ。ここにはデイケア（定員60人）、訪問看護・介護事業所、居宅介護支援事業所、グループホーム（定員９人）が併設されており、介護保険制度が施行される前から長きにわたって地域の高齢者福祉を支え続けている。

運営母体の医療法人徳洲会は、全国に76病院を有する日本有数の医療法人グループ。１９７３年に第１号病院の徳田病院（現・松原徳洲会病院）を開設してから約半世紀、「生命だけは平等だ」の理念のもと、救急医療やへき地医療に重きを置いた「断らない医



スタッフとのおしゃべりも日々の楽しみ



カメラを向けると笑顔でピース



ハイタッチで元気よくあいさつを交わす



スタッフは入所者の「できないこと」をサポートする



療」を展開してきた。こうしたなか、1996年から介護事業に参入、「医療・介護の連携」という安心あるシームレス・ケアの構築に乗り出した。

同グループが運営する介護施設・事業所は、いずれも各地の〝徳洲会病院〟に併設、もしくは近隣に配されている。同施設は岸和田徳洲会病院から車で約10分とアクセスは良好。退院後の患者の受け皿としてはもちろん、入所者の急変時にも迅速に対応できるなど、医療のバックアップにも万全を期している。

幹線道路から少し路地に入った、緑豊かな立地に佇む地上4階建ての同施設。26年前のオープン当初から現場に携わっている総看護師長の原田さとみさんに案内されて館内に入ってみると、エントランスの奥には最新のリハビリ機器が完備された機能訓練室と、デイケアの広々としたスペースが広がる。

機能訓練室では、老健の入所者やデイケアの利用者がセラピストの指導のもと、自身のADL改善に向けて真剣な眼差しでリハビリに取り組んでいる。

2階・3階の老健のフロアで特筆すべきは、多床室(4床)がアクリルパーテーションで個室さながらに仕切られた設えだ。同施設は、厚生労働省が感染拡大防止対策に係る支援として打ち出した「多床室の個室化」を昨年9月に導入。原田さんは「当初は飛沫感染の予防が目的でしたが、入所者様のプライバシーの保護にもつながりました」と話す。

また、居室からは四季折々の風景も眺望でき、4階の一般浴室に設けられた温泉のようにゆったりとした浴槽も好評だ。このように館内の随所に、入所者のQOLに配慮したハードが織り込まれている。



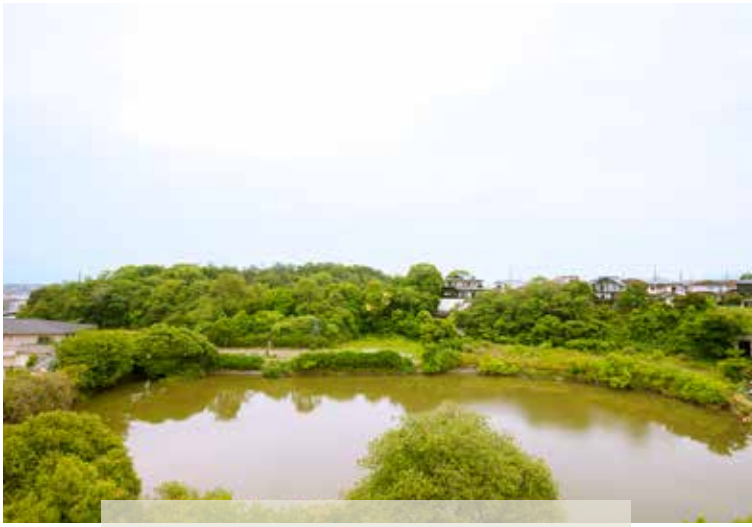
1階に設けられたデイケア



「多床室の個室化」で感染対策とプライバシーの保護を両立



セラピストと共に機能訓練室でADL改善をめざす



居室の窓からは四季折々の風景が眺望できる



「岸和田徳洲苑」のスタッフの皆さん



広々とした温泉さながらの一般浴室

医療法人徳洲会
介護老人保健施設
岸和田徳洲苑

●大阪府岸和田市三田町142
TEL 072-441-5501
URL kishiwada-tokusyuuen.tokushukai.or.jp

岸和田徳洲会病院に程近い立地に、定員100人の介護老人保健施設として1998年に開設。デイケア（定員60人）、訪問看護・介護事業所、居宅介護支援事業所、グループホーム（定員9人）も併設され、安心ある医療・介護のシームレス・ケアを通じて、入所者の在宅復帰を支援している





施設長の中林淑郎さん（右）と総看護師長の原田さとみさん

若手スタッフの育成・定着も視野にケアの質向上に全員が一致団結

入所者の在宅復帰を目標に掲げる同施設では、機能訓練室でのリハビリだけでなく、日常における生活リハビリにも気を配っている。

「私たち現場スタッフは、入所者様の残存機能を見極め、〝できないこと〟だけに手を差し伸べるようにしています」と原田さん。その言葉どおり、同施設では入所者の在宅復帰後の生活を鑑み、本人や入所者家族にも理解を促したうえで過保護になりすぎない自立支援を心がけている。同施設では「みんなが笑顔になる施設」をモットーに掲げているが、常に入所者とスタッフの明るい笑顔が絶えないのも、こうした信頼関係の賜物だと言えるだろう。

現在、同施設には原田さんをはじめ在籍年数の長いスタッフが多く、比較的定着率は高い。このことから働きやすく風通しの良い職場環境であることがうかがえるが、その一方で「若手スタッフの育成・定着」といった新たな課題も生じているという。今後の若手スタッフの育成について、施設長の中林淑郎さんはこう話す。

「次世代の介護の担い手となる若手にとって、実践的な介護技術を習得することも大切ですが、人生の大先輩である入所者様の〝生きてきた証〟を敬うことのできる、家族のような心のつながりを忘れないでほしいですね」

同施設では、医療・介護・リハビリ・栄養などの専門分野を担うスタッフが相互連携しながら、入所者一人ひとりにきちんと向き合い、適切なケアの提供に努めている。

「コロナ禍ではクラスターや重症者の対応に追われ、スタッフも心身が疲弊するなど、本当に辛い日々が続きましたが、全員が一致団結して何とか乗り越えることができました。こうした経験からスタッフ間の絆もより深まったと思います」と原田さんは振り返る。

現在、同施設の稼働率は95％。安定経営を維持していくためにも、今後もスタッフの確保・育成に力を注ぎ、提供するケアの質の向上に努めていく方針だ。





館内の至るところで、リハビリに励む入所者の姿が見受けられる